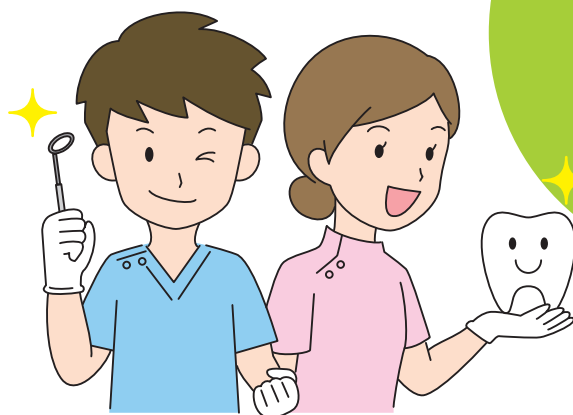


歯科臨床 **まずはここから!**

単冠補綴

卒後5年を支える

スタート
ガイド



6. 接着性レジン支台築造における間接法と直接法の選択

間接法と直接法は、それぞれに対して正確な術式を行えば物性に有意差を認めない。アンダーカットの削合を必要としない、来院回数を減らせるという点においては直接法が優位であり、マージンが全周歯肉縁上で十分なフェールールが確保できているケースにおいては直接法を選択するのが良い。間接法で行う場合は、必ず接着性レジンセメント（スーパーボンド等）を使用する。

支台築造の選択基準

根管治療が終了し、どのような支台築造を選択するかにおいて大切なことは、まず仮の支台歯形成を行って歯冠部の残存歯質を確認することである。仮の支台歯形成を行った時に、残存歯質の厚さが1mm以上確保できていることが望ましい。特に、鑄造支台築造においてはダウエルコアを合着後、支台歯形成を行っているとき薄くなった歯質が欠けてしまうこともあるため、ダウエルコアの印象時に大まかな支台歯形成まで行っておくことが大切である。その際、薄い歯質は残さないようにすると良い（図9）。

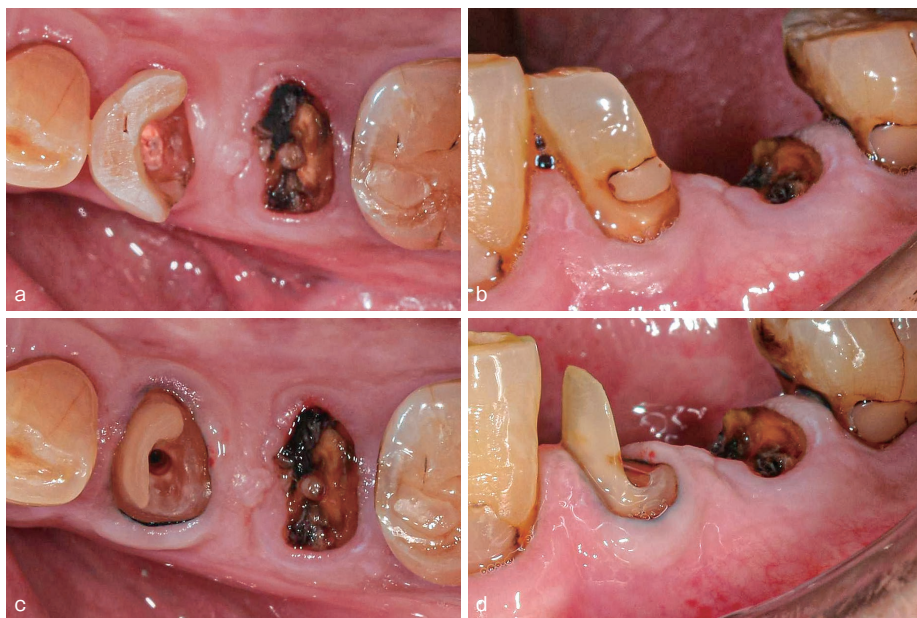


図9 支台築造のための「4」支台歯形成

- a, b: 一見残存歯質が残っているように見えても、支台歯形成を行うと大きく歯質を失うことがわかる
c, d: レジン等の不良修復物があれば、この時点で取り除いておく

5. 支台歯形態と形成の基本的なルール

冒頭でも述べたように、歯冠修復治療とは、何らかの原因により硬組織の欠損が引き起こされた歯に対し、その構造や機能を改善するための処置である。歯冠修復治療における支台歯形成とは、歯冠修復物を装着するために必要な空間を支台歯に付与することである。この際に考慮すべき要件を下記に示す。

- ① 装着された歯冠修復物が脱離、破損しないこと
- ② 装着された歯冠修復物が生体に為害作用を及ぼさないこと

装着した歯冠修復物が口腔内で長期安定して機能するために、術者は支台歯形成における構造学的要件、生物学的要件、審美的要件を知る必要がある（図1）。



図1 支台歯形成の基本的なルール

最終補綴形態と相似形でアンダーカットがなく、明瞭なフィニッシュラインの連続性という要件が満たされていれば、適合精度の良いクラウンの製作が可能となる

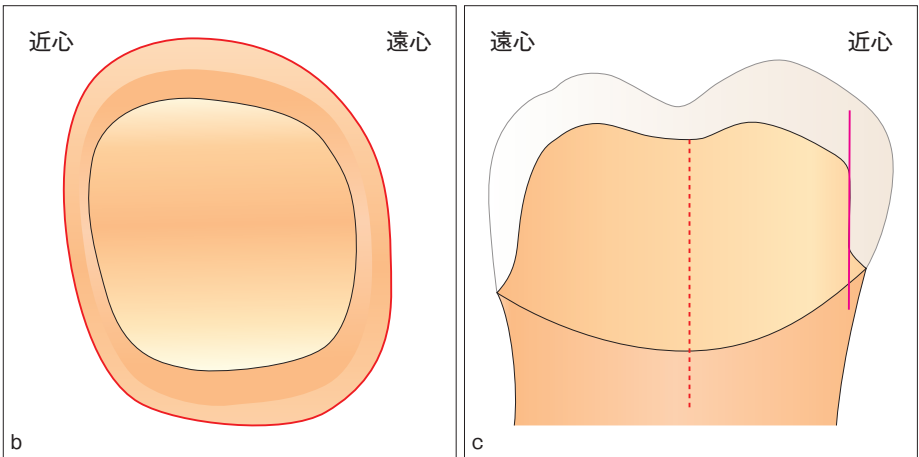
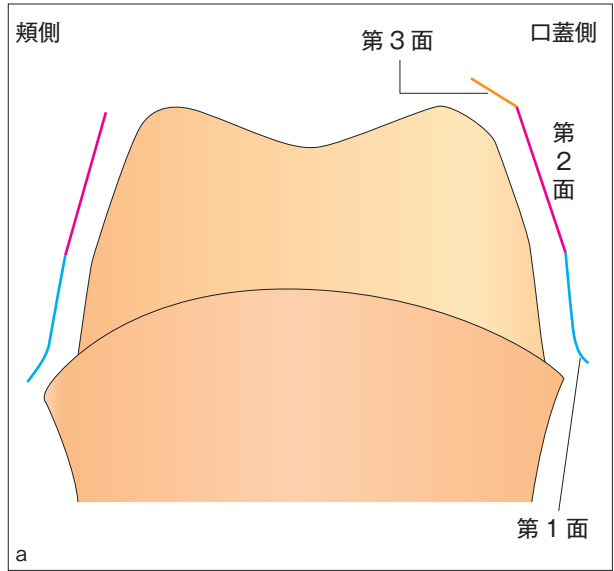


図3 上顎左側第一大臼歯に見る支台歯形成の基本原則 (文献³⁾を改変)

- a: 機能咬頭は3面形成とし、非機能咬頭は2面形成とする(第1面、第2面は前歯と同じである)。機能咬頭の外斜面に、強度の確保及び抵抗形態として第3面を形成する
- b: 咬合面はフィニッシュライン(赤線)に対して相似形にする
- c: 近心軸面は歯軸に対してできるだけ平行とし、遠心軸面でコントロールして、唇舌側の第1面と同じくテーパーが6°となるようにする。咬頭は駒形とし、補綴装置の咬頭と同じ場所に位置するようにする

注: 前歯、臼歯に関わらず、近心軸にはパーの形態によるわずかなテーパーが付与される

8. 印象採得

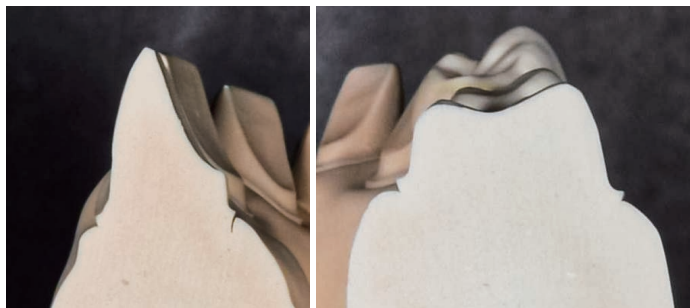
印象採得に先立ち、炎症のない健全な歯周組織であることを確認する必要がある。印象採得時に歯肉溝からの出血や滲出液が存在すると、印象は変形してしまうので、印象前に徹底的な歯周組織の管理を行わなければならない。

印象採得によって得るべき情報

- ① 支台歯形成面
- ② フィニッシュラインとその直下の歯根面
- ③ 軟組織：辺縁歯肉、歯間乳頭等

印象採得は、これまでの治療の成果を技工操作に移行するための重要なステップである。印象採得によって作業用模型上に再現されるものは、形成された支台歯と軟組織であり、形成されたマージンと軟組織とを分離し、明瞭に再現する必要がある（図1）。特に歯肉縁下にマージンを設定する場合、歯肉圧排が重要となる。

図1
作業用模型の断面図



トレーの選び方

印象対象物を適切に被覆し、印象採得時の各動作により変形、破損等を生じないものが望ましい。クラウンの印象においては、フルアーチの金属製リムロックトレー等を使用する。トレーの試適は必ず行うようにする。トレーの範囲内に歯列が収まっていることを確認し、印象時にトレーを挿入する位置をイメージしておくことで、印象採得時の位置付けによるエラーを防ぐことができる（図2）。

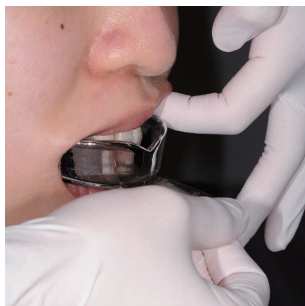


図2 リムロックトレー

印象採得前に必ずトレーの試適を行って、トレーの収まり具合を確認する。骨隆起がある場合は、トレーが当たると痛いので注意を払う

歯肉圧排の目的

- ① 印象材の流入スペースの確保
- ② 歯肉溝滲出液の抑制
- ③ 歯肉溝内のアンダーカットのブロック

フィニッシュラインが全周歯肉縁上マージンの場合には、基本的に歯肉圧排は不要と考えて良い。コードを無理に挿入すると歯肉退縮を引き起こす原因となり得るため、コードの挿入は丁寧に優しく行う。薄くて浅い歯肉溝には、原則二重圧排は行わない(図3, 4)。

コードの挿入は隣接部から始めると行いやすい(図5)。唇側の薄い歯肉に挿入する際には、3A 探針のような先の細いインストゥルメントを使用し、歯肉をデリケートに扱う(図6)。一次圧排コードは必要以上に深く挿入しないようにする。二次圧排コードが歯肉溝内に隠れてしまうようであれば、サイズを太くしてコントロールすると良い。この状態で3～5分置いて、二次圧排コードのみ除去して印象採得を行う。

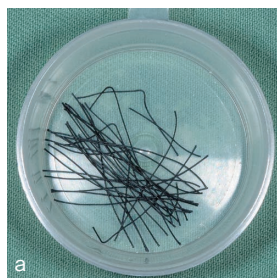


図3 圧排糸

- a: 一次圧排コード、3-0または4-0シルクの縫合糸を適当な長さに切って使用する
- b: 二次圧排コード『ウルトラパック』(ウルトラデント)